

# pegasus 63

2022年秋号  
令和4年10月発行  
第17巻第1号  
(通巻63号)

地域医療を考えるペガサス情報誌



長引くコロナ禍の  
困難にあっても  
患者さまを  
支え続ける。

Special

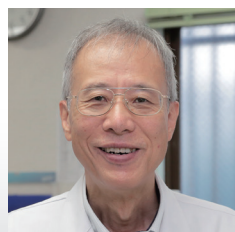


# 安心の在宅療養を 支えるために 多職種の力を結集する。

病気や障害を抱えても、  
地域の誰もが住み慣れた街で暮らしていけるように。  
その大きな目標を掲げ、ペガサスグループは  
急性期から在宅まで切れ目のない医療・介護を提供。  
入院間もないときから

在宅療養をゴールに見据えた支援を行い、  
在宅で病状が急変したときは  
いつでも受け入れる体制づくりを進めてきた。

その不断の取り組みに、  
新型コロナウイルス感染症の流行が直撃した。  
ペガサスの各施設では、一部を除いて感染予防のための  
面会制限、外部の立入制限などを余儀なくされ、  
患者さま自身も受診や外出を控えた結果、  
患者さまのサポートにさまざまな支障が生じた。  
そして、それは今も続いている。  
しかし、地域の人々が安心して在宅で  
療養できるように支えるには、コロナ禍であっても、  
必要な医療・介護サービスを止めるわけにはいかない。  
新型コロナウイルス発生から4年近く経過した今、  
ペガサスの多職種のスタッフがどんな思いで  
患者さまとご家族を支援してきたか、  
いろいろな角度から探ってみた。



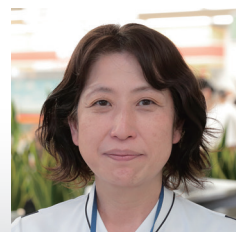
ペガサスクリニック  
院長  
永田 安徳



馬場記念病院  
医療福祉相談室  
外来専任MSW  
黒島 美貴



馬場記念病院  
医療福祉相談室  
室長  
丸山 秀幸



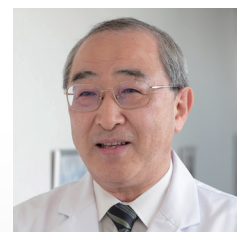
馬場記念病院  
入退院管理センター  
センター長  
吉田 礼子



馬場記念病院  
入退院管理センター  
退院調整看護師  
足立 郁



馬場記念病院  
北館3階病棟 看護師長  
兼子 由希子



馬場記念病院  
病院長  
大平 雅一



馬場記念病院  
入退院管理センター  
退院調整看護師  
大前 実紀



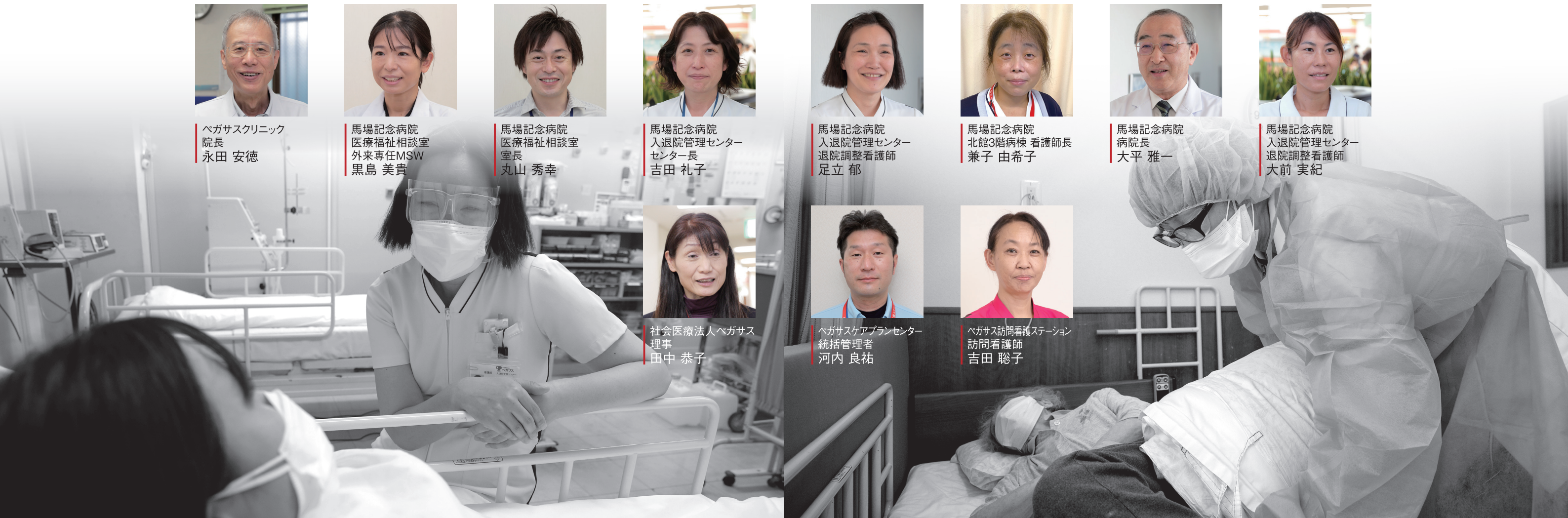
社会医療法人ペガサス  
理事  
田中 恭子



ペガサスケアプランセンター  
統括管理者  
河内 良祐



ペガサス訪問看護ステーション  
訪問看護師  
吉田 聡子





# コロナ禍にあっても、 患者さまに安心して 退院していただくために。

## 退院支援の取り組み

馬場記念病院では入院患者さまに対し、在宅療養をゴールに見据えた支援を行っている。しかし、長引くコロナ禍の面会制限などにより、退院支援は大きな影響を受けてきた。

### コロナ禍での在宅療養指導の難しさ。

退院後、ご家族に無理なく介護を続けていただくために、馬場記念病院では退院前の在宅療養指導に力を入れている。以前は、退院前にご家族に何

か病棟へ足を運んでいただき、必要な看護や介護を十分に習熟してもらい、自宅に戻っていた。しかし、新型コロナウイルスの拡大に伴う面会制限により、直接丁寧な指導が難しくなった。

たとえば、胃ろう造設のために、今春、馬場記念病院に入院した70代女性のケースを取り

上げてみたい。胃ろうとは、お腹に小さな穴を開けて胃までチューブを通し、そこから直接栄養を取るもの。手術は無事に終わり、本人もご家族も早く自宅に戻ることを希望したが、胃ろうの日常的な管理をどうするかという問題が残された。

胃ろうの管理には、チューブの繋ぎ方、注入食のスピードの設定などの注意点が多々あり、身近な家族が基本的な手技をマスターすることが条件になる。退院調整看護師の大前実紀（入退院管理センター）は、感染予防のために病棟ではなく1階の

個室を確保し、ご家族に1度だけ来院していただく段取りを整えた。但し、1度の指導では当然、専門的なケアをマスターすることはできない。「あらかじめ、ケアマネジャー、訪問看護師に連絡し、在宅療養指導に立ち会っていただくことにしました。

その狙いは、ご家族がどの程度理解しているか、現状を知っていただくこと。その上で、必要な手技を家に帰ってから学んでいた（こうと考えました）（大前）。

### 在宅医療チームとの連携が重要。

在宅療養指導の当日。こわい様子を見て、ケアマネジャーと訪問看護師は退院したその日から訪問することを約束。「家に戻っても私たちがお手伝いしますから、安心してくだ

さい」と話す二人を見て、私たちも安堵しました」と大前。その他に必要な褥瘡ケアなどについても丁寧に応じ送りをして、退院の日を迎えた。「私たちとしては万全の準備をして送り出したのですが、なかなかそうはいかず、悔いが残ることもあります。そこで力をお借りするのが、在宅医療チームです。面会制限で私たちが支援できない分、できるだけ早く在宅医療を担う医師、看護師、ケアマネジャー、デイサービスの方々と連絡を取り合い、面会制限の壁を乗り越えるよう努めています」（大前）。



退院後の支援について話し合う入退院管理センターの大前看護師とベガサスケアプランセンターの河内統括管理者。



患者さま・ご家族に在宅での胃ろうの管理方法を習熟いただくために指導する退院調整看護師の大前看護師と病棟看護師。



「面会制限で会えない不安を抱える患者さま、ご家族に寄り添い、スムーズな退院を支援しています」と大前。



**子どもの卒業式に出席したい。**

次に、コロナ禍での外泊を実現させた事例を紹介したい。令和3年(2021年)12月、馬場記念病院に転院してきた末期がんの40代女性。数年前、大阪市立大学医学部附属病院(現・大阪公立大学医学部附属病院)で食道がんと診断。手術を受けたが、その後、再発。抗がん剤治療などをしてきたが、病状の改善は難しかった。そこで、痛みのコントロールと全身管理のために、自宅に近い馬場記念病院に転院してきた。

馬場記念病院の大平雅一病院長は、就任前、大阪市立大学医学部附属病院の消化器外科チームを率いていたことから、患者さまのことをよく覚えていた。「ときどきベッドサイドを訪ねて、励ましました。食欲が落ちていたので、しっかり食べておうちに帰って、また抗がん剤治療をしていきましょう。お子さんのためにも、弱気になつたらダメですよ、と伝えました」(大平)。

大平病院長の励ましもあり、患者さまは懸命に闘病生

活を続けたが、体調はなかなか戻らなかった。そんな日々のなかで、患者さまはスタッフにこんな相談を投げかけた。「実はもうすぐ、長男の小学校の卒業式があるんです。何とか出席できないでしょうか」。

**1泊2日の外泊許可で自宅へ。**

患者さまの希望を知った病棟看護師の兼子由希子は振り返る。「普段は辛そうな表情が多かったのですが、卒業式の話

をすると、笑顔が見られました。何とか希望を叶えてあげたいと思いました」。

問題は2点あった。一つは、市中に広がる新型コロナウイルス。ちょうど第6波の流行が減少傾向にある令和4年3月だったが、感染者数は高止まりの状態で予断は許されない状況。もちろん馬場記念病院では、病棟にウイルスを持ち込ませないため、外出も外泊も原則禁止して

いた。「ICT(インフュージョン・コントロールチーム…感染対策チーム)に、どんな感染予防対策をすれば、外出・外泊が可能になるか、相談。マスクや手洗いなどの徹底、外食の禁止、ご家族以外の人との接触制限など細かい注意点をご本人、ご家族に伝えました」と話すのは、退院調整看護師の足立 郁(入退院管理センター)である。もう一つは、患者さまの体調

**「へ家に帰りたい」という患者さまの切なる思いを叶えるために、スタッフみんなで奔走しました」(大平病院長)。**



ベッドサイドで患者さまを励ます大平病院長と入退院センターの足立看護師。



退院を控えた患者さまの支援について相談する足立看護師と河内統括管理者。

管理である。患者さまは肝臓に溜った膿を体外に誘導するためにドレーンといわれる管が何本か腹部に挿入されている状態。管が抜けたり、逆流しないよう注意深く扱う必要がある。患者さまとご家族にドレーンの管理方法を伝えると同時に、急遽、訪問看護師を依頼。外泊中のドレーンの管理をはじめ、痛みのコントロールや血圧の管理などを行うよう引き



患者さまの希望に応えられるよう医師と相談する兼子看護師長。

継いだ。こうして患者さまは1泊2日で自宅に戻り、卒業式に参加した日の夜、満面の笑顔で病院に戻ってきた。兼子たちスタッフは安堵の気持ちで迎えるとともに、すぐに新型コロナウイルス抗原定量検査を行い、陰性を確認した上で、念のためしばらく個室に入院していただく体制を取った。





上:病棟のスタッフステーションで、退院に課題を抱える患者さまの支援策について話し合う病棟看護師と退院支援看護師。  
下:日々、患者さまの支援に奔走する入退院管理センター・医療福祉相談室のスタッフたち。

## 退院に向けて スタッフ力が 力を合わせる。

実はこの患者さまにはもう一つのエピソードがある。外泊許可を契機に、自宅へ戻るという希望も実現したのである。念願だった卒業式から病院に戻った患者さまは、しばらくして「卒業式を終えた長男（）中学の入学式にも参加し

たいなあ」と話すようになった。もう一度外泊許可を取ることができたが、もともと患者さまもご家族も、残された日々を自宅で過ごすことを強く希望していた。先の外泊で患者さまの満足そうな笑顔を見ている大平病院長をはじめスタッフたちは、何とか退院できないか話し合いを繰り返した。しかも、退院するならば、入学式の前が望ましい。早速に行動しなくてはならなかった。「主治医の退院許



患者さまの状況についてリハビリテーションスタッフと相談する入退院管理センターの吉田センター長。

可を得てから、入退院管理センターの吉田礼子センター長が中心になり、精力的に準備を進めました。ケアマネジャーと訪問看護師、往診して下さる診療所の先生を探して依頼し、ケアマネジャーにレンタルベッドなどの住環境の準備もお願い

しました。本当に短期間で集中して準備しました」と足立は振り返る。在宅に必要な医療処置は非常に多い。24時間の点滴管理、1日複数回の痛み止めの薬、栄養管理、ドレーン管理など。病院スタッフと在宅医療チームが



退院後の患者さまの支援について医師、病棟看護師、退院支援看護師等、多職種で話し合っている。

一堂に集まった退院カンファレンスで、それらの医療処置の注意事項や役割分担について綿密に確認してから、自宅へ戻っていた。

## コロナ禍の外泊経験が 退院へ繋がった。

このケースを振り返り、大平病院長はこう話す。「患者さまの病状からすると、退院は難しいという判断でした。ただ、コロナ禍で1泊2日の外泊をクリアできたことから、私たちスタッフも送り出そうと決心できました。支えるご主人は大変だったと思います。患者さまが最期の日々をお子さんに囲まれて過ごすことができ、本当に良かったと思います。そして、こう続けた。「また、スタッフみんなの情熱が事態を動かしたんだと思います。どんなに困難があっても、患者さまのために一番いいことをしたい、という、みんなの強い気持ちを感じましたね。この事例は、コロナ禍であっても、末期がんであっても、環境を整えれば（おうちに戻れる）という私たちの自信に繋がりました」。



# コロナ禍にあつて、社会的に 孤立されている方を 支えたい。

## ソーシャルワーカーの取り組み

長引くコロナ禍で顕在化した問題の一つに、社会的に孤立している人たちの存在がある。そうした方々の援助に力を注ぐ。ソーシャルワーカーの取り組みを見ていきたい。

### 退院後も

### コロナ後遺症に 悩む人たち。

ペガサスでは和泉市から業務委託され、「ペガサスイキイ

キネット相談支援センター」を運営。専門相談員であるCSW（コミュニティソーシャルワーカー）が福祉に関わる困りごとに幅広く対応している。馬場記念病院・医療福祉相談室室長の丸山秀幸は、院内のMSW

（医療ソーシャルワーカー）として活動するかわら、このCSWを兼務している。コロナ禍のCSWの相談内容でどんな変化があっただろうか。「生活全般の相談に加え、健康や医療に関する相談が一気に増えました。たとえば、感染の不安から受診を控え、治療を中断してしまつた（コロナの影響で失業し、飲酒量が増えて吐血した）など。これらの根底には、コロナ禍で人との接触が減り、社会的に

孤立する人が増えている状況があると考えました」（丸山）。

こうした経験から丸山は、社会的に孤立されているかもしれない方への支援として、馬場記念病院においてコロナ入院患者の退院後のサポートに乗り出した。具体的には、退院後2週間をめどに電話連絡し、体調や社会復帰の状況などを確認。

症状が持続するのであれば、病院の受診を促したり、休業補償として申請できる傷病手当金などの手続きについて相談につた。この電話サポートを通じて、退院患者さまの約1割強の

人が（体調不良や後遺症から復職・復学ができていない）ことがわかったという。そうした人々への相談援助は、現在も地道に続けられている。

### 医療や福祉に アクセスできない 人たちの存在。

さらに、丸山は話す。「この2年余りで、コロナの患者さまだけでなく、必要な医療や福祉にアクセスできない方が多くいらつしゃることも見えてきました。コロナ禍の自粛生活の影響もあ



退院後の患者さまで気になるケースについて話し合う医療福祉相談室長と外来専任のソーシャルワーカー。

「退院した後も、それぞれの方が生活上の課題をお持ちです。そこまで視野を広げた支援が必要だと思います」と丸山。



外来専任のソーシャルワーカーが、相談ブースで不安を抱えるご家族のお話をうかがうこともある。





り、孤立する人が増えてきたのです」。その問題を解決するために、丸山たちが決断したのは、外来に専任のMSWを配置することだった。

通常、MSWの守備範囲は、入院患者さまを中心に通院患者さまも含めて相談に応えるのが一般的だ。馬場記念病院でもそのような業務体制になっていた。なぜ、外来への配置なのだろう。「医療や福祉の助けを求める人のニーズをキャッチするには、外来で情報収集するのが

近道です。これは私たちにとって新しいチャレンジでしたが、地域で困っている人を一人も取りこぼすことなく支えていくために、どうしても必要だと考えました」(丸山)。

### 外来専任のMSWとして活動を始めて。

外来専任MSWの業務は主に二つ。一つは、再診予約に来なかった方のフォロー。もう一つは、

救急外来で入院適応にならず自宅に戻る患者さまのサポートである。

外来専任になった黒島美貴(医療福祉相談室)に話を聞いた。「再診予約については、来られていない人のなかから問題がありそうな人に電話しています。受診しなかった理由は、コロナ感染を避けるために受診をやめた、仕事が忙しくて忘れていた、薬がまだあるのでやめた、などいろいろあります。でも、そのまま未受診が続くと、持病

が悪化すると感じた場合、すぐ再診の予約を取り直していただいています」。

救急外来ではどんな活動をしているのか。「たとえば、道端で転倒、通りかかった人が119番して搬送されてくる高齢者の方が結構いらっしゃいます。話を聞くと、独居で一人暮らし。介護保険のサービスなどを受けられないことも多くあります。そんな場合、保険の申請などをお手伝いして、必要なサービスに繋がるようサポートします」。

外来専任になり、黒島は医療福祉が必要なのにアクセスできていない人が多く驚いているという。「独居、認知低下、アルコール依存、虐待疑い、DVなど、助けが必要なのにSOSを発信できない人がたくさんいらっしゃいます。そういう方々の力に、少しでもなっていきたいですね」。コロナ禍で、一人ひとりが孤立しやすい状況にもある。医療福祉相談室は、地域に視線を広げ、支援活動を展開している。



上:通院の途絶えた患者さまを外来専任のソーシャルワーカーが電話で状況を確認している。

下:医療相談室長とはまめに情報共有を図るようにしている。

## Special

# 感染しても 生活の場で支え、 ADLの低下を防ぐ。 在宅支援の取り組み

コロナ禍でも変わらないサポートに尽力してきたケーススタディとして、最後に在宅のシーンを取り上げてみたい。

### 80代女性の コロナ感染。

事例を紹介するのは、サービス付き高齢者向け住宅(自分の住まいで暮らしながら、必要な医療介護サービスを受けられる施設)のペガサスロイヤルリゾートである。第6波の流行が

ピークを迎えた令和4年2月、入居していた80代女性に、発熱や咳、倦怠感などの症状が見られた。施設の管理人から馬場記念病院へ連絡。臨床検査技師がすぐにつけ、居室で新型コロナウイルス抗原定量検査を行ったところ、陽性。この女性の他にも、複数の入居者に陽性が見つかったが、幸い、全員が軽症だった。

この時期、新型コロナウイルスはオミクロン株に置き換わっていて、比較的重症化することは少なく、自宅療養が主流になっていた。しかし、施設で療養するとすると、他の入居者への感染リスクもある。在宅療養か、入院か。難しい決断を下したのは、主治医であるペガサスクリニックの永田安徳院長だった。「体温や呼吸状態など、ご入居者の病状を日々こまめにチェックできれば見守っていけると、在宅療養を判断しました」。永田がそう決意したのは、ADL(日常生活動作)の低下が心配だっ



ペガサスロイヤルリゾートのスタッフに指示をするペガサスクリニックの永田院長。



たからだ。高齢者にとって、入院することは肉体的・精神的な負担が大きい。ベッドで過ごす時間が長くなれば、筋力が大幅に

低下するリスクもある。とくに認知症を患っている場合、入院による環境変化から興奮や徘徊などの症状が出やすくなる。

「酸素投与が必要にならない限り、この生活の場所でご入居者を見守っていきましょう」。永田の提案に訪問看護師やデ



ペガサスロイヤルリゾートでも十分な感染対策をした上で、入居者さまの健康状態を確認する訪問看護ステーションの吉田看護師。

イサービスの職員たちは共感し、在宅で支える体制を構築することになった。

### 多職種が一致団結して、陽性者の生活を支える。

基本的な支援体制は次の通り。朝の食事やおむつの介助は訪問看護師、昼はヘルパー、夕方は施設に併設されているペガサスデイサービスセンター神石の職員が担当。その他、ペガサスケアプランセンターのケアマネジャーがご家族とこまめに連絡を取り合うなど、多職種による役割分担が組まれた。

陽性者の在宅療養を支えることになった、訪問看護ステーションの吉田聡子は次のように振り返る。「感染した方が複数いらつしゃったこともあり、全員をフォローできるのか、最初は不安でした。でも、三野直人統括所長（ペガサス訪問看護ステーション）をはじめ、多職種で支え合えたので、何とか乗り越えることができました」。

吉田は三野とともに毎朝、入居者の体温やサチュレーション（動脈酸素飽和度）を測り、聴診器を胸にあてて肺や呼吸状態を確認。それらの結果を逐

「永田院長に報告し、指示を仰いだ。永田先生は必要であれば、すぐに指示をくださいましたし、往診していただけるので心強かったですね」（吉田）。

### 施設内に感染が広がらないように。

吉田たちは、陽性の入居者の部屋に入る際は、ゴーグル、ガウン、N95マスクなどをしっかり着用し、スタッフの二次感染を防止。他の入居者に感染が広がらないように万全の対策でのごんだ。しかし、二つだけ問題があった。それは、陽性の入居者が悪気なく、部屋を出てしまうことだ。「80代の女性は認知症を患っていて、自分が感染したという認識をお持ちではありませんでした。そのため、お腹が空くと部屋を出てしまうこともよくあり、そのたびに職員が優しく諭してお部屋へ連れていき、廊下やエレベータを徹底的に消毒しました」（吉田）。

こうした日々がおおよそ3週間、続いた。連日朝の抗原定量検査で陰性を確認し、ようやく女性は隔離を解除されることとなった。「ペガサスでは厳しいルールで陰性確認しているの

## 「毎日、体温や呼吸状態などを確認しながらお世話をしました。ご入居者の回復が何よりの喜びでしたね」（吉田）。

で、時間がかかりました。でも、部屋を出られると、いつもの笑顔が見られました。ああこの笑顔が見たかった、と思いました」と、吉田は微笑む。

### 過度な自粛による身体機能の低下が問題。

ペガサスロイヤルリゾートのケースでは、隔離期間中も入れ替わり立ち替わり多職種のサポートが入ることによって、ご入居者のADLを何とか維持することができた。しかし、自宅で療養している人のなかには、コロナ禍で外出を控えたためにADLが低下した高齢者が増加しているという。

ペガサスケアプランセンター統

括管理者の河内良祐に、外出自粛を長く続けたご利用者の話を聞いた。「60代の女性で、コロナ感染を避けるために、1年間、通所リハビリテーションを自粛していた方がいました。ご自宅を訪問するたびに、動きが緩慢になってきたように感じていたのですが、ある日、立ち座り動作でふらついたのを見て（これは何とかしないと寝たきりになってしまふ）と危機感を募らせた。明らかに筋肉量が低下し、自分で体を支えることが難しくなっていたのです。ご家族に通所リハの再開を提案したのですが、感染リスクへの警戒感からなかなかいいお返事がいただけません。2、3カ月かけて根気よく説得して、ようやく訪問リハビリテーションに切り替え

ていただくことができました。その後、理学療法士が定期的に訪問し、家の中で歩行訓練や立ち座りの訓練を続けた結果、今では以前の筋力を取り戻しています」（河内）。

高齢者の場合、数週間ベッドで過ごしているだけで歩けなくなる人もいるという。筋力の維持、ADL低下の防止は、コロナ禍の在宅療養の大きな課題である。

### できる限り平時と変わらないサービスの提供を。

ここまで病院の退院支援からMSWの取り組み、在宅の現場まで、さまざまなお悩みやコロナ禍の困難に立ち向かってきた事例を紹介してきた。それらに共通するのは、退院後の生活をずっと支えていきたい、というペガサスの変わらない思いである。ペガサス法人本部長理事 兼 馬場記念病院事務部部長の田中恭子に、これまでの取り組みを振り返ってもらった。

「新型コロナウイルスが出た3年前は、新しいウイルスが何者かわからず、恐怖心が強くありましたね。そのため、患者さまやご利用者の支援も（非対



ヘルパーもしっかりと感染予防をした上で、入居者さまの体位変換などを行っている。

面非接触）にせざるを得ないことが多くありました。今振り返ると、それらは感染予防対策としては100点満点だったかもしれませんが、失ったものもありました。たとえば、最初の頃はご家族と会えないまま亡くなつていく方もおられ、私たちもとても辛い思いをしました」（田中）。

しかし、新型コロナウイルスの医学的エビデンスが明らかになるにつれ、ペガサスではしっかりと感染対策をした上で、（非対面・非接触）ではない支援に精一杯力を入れる方向へと舵を切ってきた。たとえば、デイサービスセンターなどを決して閉鎖しない、ケアマネジャーの訪問活動を電話で代行しない、など、できる



平時と変わらぬサービス提供のため組織全体の管制塔の役割を担う田中理事。



限り平時と変わらないサービスの提供に努めてきたのだ。

### 感染防止のために、すべて

やめるのではなく。

「私たちとしては、コロナ禍であつても必要な医療介護サービスの提供を止めませんし、在宅で療養される方にも、できる限りサービスの利用を継続していただくようお願いしています。ご利用者の健康を守るために、それはとても大切なことだと思います」と田中は話し、さらに続けた。「感染防止のために、医療・介護サービスを中断することは、実はそれほど難しいこと

ではありません。でも、はたして簡単に中断してしまつていいのかどうか。患者さま、ご利用者、職員それぞれの立場で問い直すことが重要だと思います」。

さらにペガサスでは今、もう一歩先を見つめて動き出しているという。「感染防止のために何もかもやめるのではなく、やめるをやめよう」をスローガンに動き出しています。たとえば、職員の福利厚生生のクラブ活動なども、ICTを中心にしたメンバーが検討を重ね、感染予防対策を工夫し、再開しました。そうやって一歩ずついろいろな自粛や制限を緩和しながら、本来あるべきペガサスの姿に戻していきたいと考えています」(田中)。



入居者さまのお部屋に入るときは、廊下で防護服を着用する。



ペガサスロイヤルリゾート入居者さまのコロナ感染対策について話し合う多職種スタッフ。

### コロナ禍の在宅療養支援を語る。

# コロナ禍で得られた経験をベースに、この地域に、退院から在宅療養まで切れ目なく支援できる体制を構築していききたい。

社会医療法人ペガサス理事長兼 社会福祉法人風の馬理事長  
馬場武彦

### 医療も介護も人との触れ合いが基本。

かつては病気を治療して退院していただくのが病院の使命だった。しかし、超高齢社会を迎え、地域医療はへとどきき入院、ほぼ在宅の時代へと転換。必要な治療を在宅で受け、ときどき病院を利用しつつ、在宅で生活続ける方向に進んでいる。ペガサスグループはそのニーズを先取り、早くからペガサス・トータルヘルスケアシステムへの構築を推進。馬場記念病院をはじめとする「医療」を核として、近隣地域に訪問看護

ステーションやデイサービスセンターなどの関連施設を設置し、退院後も患者さまが継続して切れ目のない医療介護サービスを受けられる体制づくりに力を入れてきた。

そこに新型コロナウイルスの感染拡大が起こった。非対面・非接触を推奨する体制になり、職員たちは大いに苦悩してきた。「本来、医療も介護も、人と人が触れ合つて行うものです。それが許されなくなり、患者さまの退院を支援し、その後の生活をサポートする上で、数々の困難が待ち受けていました。でも、それらをつつと乗り越えることで、私たちはいざというときのペガサスの団

結力を改めて確認できたように感じています」と馬場は振り返る。

困難が多かった一方で、コロナ禍で得たノウハウもある。「たと

えば、訪問看護では従来、手書きの記録が中心でしたが、感染予防対策の一環として、タブレット(画面を直接触つて操作する情報端末で記録するようにな

りました。これにより、スタッフ間の情報共有が進み、業務の合理化にも繋がっています。今後ICT(情報通信技術)を積極的に取り入れることで、働きやすい環境を作るだけでなく、患者さまにより質の高い医療・介護サービスを提供していきたいと考えています」。

### 地域の医療・介護に関わる事業者のさらなる連携が課題。

ペガサスグループから地域へ目を向けると、コロナ禍で浮き彫りになった課題もある。それは、地域の医療・介護の連携不足だ。政府は令和7年(2025







年)をめどに「地域包括ケアシステム(※)」構築を進めているが、長引くコロナ禍で、医療・介護に関わる人々の情報共有や意見交換の機会が激減し、その仕組みづくりの進捗に大きな影響を与えている。

「地域の医療・介護の連携強化は大きな課題だと思います。私たちペガサスは、地域の基幹的な社会医療法人として、地域の医療・介護に関わる皆さまとより一層協力関係を加速させていかななくてはならないと考えています。そのためには、コロナ禍で中断しているような勉強会や情報共有の集会をできる限り早く再開し、以前と同じように地域の方々と顔と顔の見える関係を作っていきたいと思えます」と馬場は話す。

※地域包括ケアシステムとは、住み慣れた地域で、医療・介護をはじめ、予防・住まい・生活支援を一体的に提供できる仕組みづくりのこと。地域の医療・介護に関わる事業所が連携し、高齢者の暮らしを包括的に支援していくことをめざしている。

### ペガサス・トータル・ヘルスケアシステムをこれからも推進していく。

地域の医療・介護の連携を進めるために、厚生労働省は平成29年(2017年)に「地域医療連携推進法人」の制度をスタートした。これは、病院・診療所・介護老人保健施設などが連携して、核となる一般社団法人を設立し、医療・介護のシームレスな提供をめざすもの。地

域包括ケアシステムの構築に貢献する制度として期待されている。

しかし、ペガサスではすでに、同じ法人内で医療・介護サービスの切れ目なく提供するための「ペガサス・トータル・ヘルスケアシステム」の構築を進めている。「私たちにとっては、地域医療連携推進法人がカバーする領域を一つの法人で担っていることになります。患者さま、ご利用者の視点に立てば、同じ法人内で救急・急性期医療から回復期、慢性期、在宅支援までをカバーできることは、大きな安心感に繋がると思います。グループ内の職員が緊密に情報共有することで、患者さまやご利用者、ご家族の思いにしっかりと寄り添い、スピーディにきめ細かく

サポートできる強みがあります」と馬場は話す。

時代を先取りするように、この地域で在宅療養する人々を支援していく体制づくりを進めるペガサス。その先に馬場はどんな未来を描いているのか。

「ペガサス・トータル・ヘルスケアシステム」を展開する強みを活かしながら、さらに地域の医療・介護に関わる事業所と連携を深めることで、この地域に、理想的な地域包括ケアシステムを構築していきたいと考えています。それは、コロナ前から変わらない思いですし、これからも貫いていきます(馬場)。

コロナ後の地域医療をしっかりと見つめ、馬場は変わらない使命感を胸に、この地域で暮らす人々を支えていくこうとしている。

## つばさ 63

2022年秋号  
令和4年10月発行第17巻第1号  
(通巻63号)

### 地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人 馬場武彦  
編集長 平岩敏志  
編集 ペガサス広報委員会  
発行 HIPコーポレーション  
社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244  
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>

今号の第2特集は休載です。毎回、馬場記念病院と連携し地域医療を支えてくださっている診療所をご紹介しますが、診療所の先生方が新型コロナウイルス感染症のワクチン接種などで多用のため、また感染予防のために取材撮影を控えることとなり、掲載を見送らせていただくこととなりました。



「患者さまにとって、一番良いことをしたい」。  
医療従事者として、素朴で当たり前の思いです。  
医療は、人と人とが触れ合うことで成り立つもの。  
コロナ禍では、さまざまな制約を受けました。  
それでも、医療を必要とする方に、  
必要な医療を、いつも変わらず提供し続けるという、  
ペガサスの本来あるべき姿をどう貫くか——。

未知のウイルスに、手をこまねいた時期がありました。  
苦い思いを噛み締めたときもありました。  
ウイルスのエビデンス(科学的根拠)が明らかになるに従って、  
一歩進んでは、立ち止まり考える。また一歩踏み出す……。  
やるべきことを、やるための道筋を、つけていきました。

医療サービス提供の本質は、  
エビデンスに裏づけされた、人に寄り添う思いです。  
これまで以上に広がった思いを胸に、  
私たちペガサスは、  
これからも、地域の包括的なケアシステム構築を見つめ、  
患者さま、生活者を、ずっと支え続けていきます。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦